

上方の俳諧会式資料二種

桜井文庫蔵 『執筆伝』、野風呂記念館蔵 『俳諧会式』

竹内千代子（立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員）

E-mail 13v00057@gst.ritsumei.ac.jp

要旨

桜井文庫に蔵する『執筆伝』は俳諧の会式、とくに執筆（宗匠に協力しながら懐紙を記録する役目の人）の心得を記した一書である。本資料からは、近世後期において、市井の俳諧師達が、和歌の相伝さながらに、口伝などをもって俳諧を継承していく様子がわかる。大衆に享受された安易な俳諧ばかりではなく、一方で本稿に紹介したような従来の俳諧史観とは異なる様相が知られる。なお、近世前期の公家や上級武士の余技としての俳諧とも異なる。

近世の俳諧の会がどのように執り行われていたかという資料は、散見される。しかし、それらをまとめて体系的に考察されることはなかった。そこで本稿では、考察に先立ってその資料を翻刻紹介する。桜井文庫では、その資料が当該の一書のみのため、その他の資料として、野風呂記念館蔵『俳諧会式』を紹介する。同書は公開されているが、閲覧等に制限があり、写真を付して紹介し、研究に供する。

abstract

Introducing in this paper are two Haiku-session books. “Shuhitsu-den” from Sakurai Collection of Ritsumeikan University Art Research Center and “Haikai-kaishiki” from the library of Noburo Memorial Hall.

“Shuhitsu-den”, written in Osaka, was a book to orientate the haiku recorder-cum-regulator to the formality of haiku session. One of the facts revealed in this book is that haiku was transmitted by word of mouth by haiku poets of the time as Waka was transmitted in the earlier periods. The book also discloses unorthodox types of haiku that existed beside popular types of haiku.

For a systematical study of the materials which documented the procedure of haiku sessions, “Haikai-kaishiki”, written in Kyoto, is also introduced herewith.

近世の俳諧の会がどのように執り行われていたかという資料の報告^①はある。しかし、それらをまとめて体系的に考察されることは知らない。そこで本稿では、その考察に先立って会式資料を翻刻紹介する。まずは、立命館大学アート・リサーチセンターの桜井文庫に蔵する『執筆伝』を翻刻紹介する。これにより近世後期の大阪俳壇を考察することが出来る。次に、これまで紹介されていない野風呂記念館^②に蔵する『俳諧会式』を紹介する。これは、京・近江俳壇を考察するものであるが、『執筆伝』に関係している大阪・京で活躍した不二庵二柳の影響も考えられる。

なお、桜井文庫では、俳諧会式の資料が当該の一書のみのため、その他の資料を順次補う予定である。

『執筆伝』は、俳諧の会式、特に執筆の遣り方を記した一書である。

本書は、近世後期(寛政期頃)の大坂俳壇に勢力を持っていた二柳の相伝であり、同門の俳諧の礎として引継がれていく。近世後期、明治前期の市井の俳諧師達が、和歌における相伝さながらに、口伝などを以って同門の俳諧を引継ぐ様相は、これまでの俳諧史の庶民的な捉えられ方とは異なる。また、公家や上級武士における余興としての俳諧ではなく、俳諧のみを執り行う会式は注目に値する。また、反古庵天来の口伝を伴う指導も追加しており、市井の俳諧師達が扱所とする会式を求めていた実証として注目されるのでここに翻刻紹介する。なお、榎本其角から松木淡々に宛てた口決を引用し、俳諧の由緒を示しているのも、近世後期の市井の俳諧師達の扱所の一つとして認識されよう。

書誌を記す。縦一八・二糎、横一二・二糎。写本一冊。ただし、罫線は印刷した用紙を使用。表紙に「執筆伝」と直書きする。表紙、裏表紙共紙。内題「執筆伝」。序、跋なし。識語は、「つる雄みづから誌置もの也 寛政四壬子年卯月十五日」及び、「天保十五辰年四月写之 不角」。ここからは、つる雄が写した写本を不角が写したことが知られる。さらに、巻末に「蒼映」の朱印があり、高砂蒼映の旧蔵本であることが知られる。これは、付属文書の「不二庵不角」宛「起請文之事」により、「明治十九年十月 高砂蒼映」が起請文を差出して不角写本の書写を許されたことから判る。また、頭注には、天来から口伝が記されているが、これは不角の聞き書きであろう。立命館大学アート・リサーチセンター桜井文庫蔵、請求番号「sakBK02-0479」。本文はARC所蔵・寄託品古典籍データベースで公開されている。

二柳は、享保八(一七二三)年生、享和三(一八〇三)年三月二八日没、享年八一歳。加賀の人。別号、不二庵。希因門。諸国を巡り、明和八(一七七二)年暮頃から大坂に居を定め、上方俳壇に勢力を持つ。

つる雄は、二柳門。寛政四(一七九二)年四月一五日に二柳の口伝を受け『執筆伝』を著す。その他未詳。

不角は、不二庵を称する。天保十五・弘化元(一八四四)年四月に、つる雄本より『執筆伝』を転写す。その他未詳。

蒼映は、高砂氏。明治一九(一八八六)年一〇月に、不角転写の『執筆伝』を写す。その他未詳。

天来は、天明八(一七八八)年生、文久三(一八六三)年一月没。享年七六歳。摂津難波の人。牧岡氏。別号、反古庵、花咲舎など。反古庵二世左逸門。貞徳道統七世を称す。

二

『俳諧会式 第五輯』は、俳諧の会式のうちの一部を記した一書である。題名の「第五輯」からは、その前後があったものと推測されるが、他の存在は知られない。古巢園去何は五升庵蝶夢の高弟で、近世後期の京都俳壇を反映したものととして注目されるのでここに翻刻紹介するに価すると考える。

書誌を記す。縦一八・〇糎、横一三・二糎。版本一冊。表紙「近江古巢園去何翁著 俳諧会式 第五輯 朝日のや」。表紙、裏表紙共紙。表紙共全六丁。内題「俳諧会式 古巢園去何著 旭山校」。序、跋、刊記なし。成立年未詳。野風呂記念館蔵、請求番号「和/624/5」。閲覧の機会が少ないので、本文の写真を付す。

去何は、宝暦元(一七五一)年生、文化一三(一八一六)年五月三日没、享年六六歳。渡辺氏。別号、古巢園。近江国速水の村長。蝶夢門。蝶夢の編著の版下筆者。また、蝶夢の旅に随行したことがある。

旭山は、朝日のや。近江の去何門か。未詳。

蝶夢は、享保一七（一七三二）年生、寛政七（一七九五）年一二月二四日没、享年六四歳。別号、五升庵。京都の僧。宋屋門から支麦系へ転向。二柳から京の地方系俳壇を受継ぐ。義仲寺の護持など芭蕉顕彰の活動を全国に展開する。正式俳諧しょうしやうの復興を図り、連句の盛行を促した。

翻刻

凡例

- 一、翻字は、概ね原本の字配りに従った。
- 一、割注、頭注などは、適宜記した。
- 一、漢字は、常用漢字体を用い、異体字も概ね通行の字体に改めた。
- 一、かなも同様に通行の字体に改めたが、カタカナの意識で記されている場合は原文のとおりとした。
- 一、送りがな、振りがな、ルビは原則として原文のとおりとしたが、濁点を補い、適宜、句読点を施した。
- 一、誤字・脱字などには、(ママ)を傍記し、原文のとおりママに翻刻した。
- 一、必要に応じて丁数は漢数字で記し、表(オ・裏(ウ))を各丁の終り毎に表示した。

一 翻刻 『執筆伝』

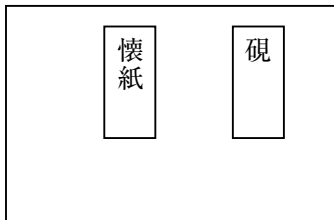
執筆伝

(表紙)

執筆伝

さくらみ蔵(旧蔵印)
つる雄秘庫
(表紙見返し)

文 台 之 図



筆に鞘をかけ不可置。
尤、筆一對。但し、白毛置
べからず。少し墨に染て
置べし。
懐紙の中に水引あるべし。
(一オ)

常は文台の頭を床へ向つて置いて、床には本尊をかけ、花なども生けたる時は、はなの右の方、床の上にも置なり。併、花瓶など（備忘）有時は床の前の下におくべし。花なきときは、勿論とこの上に置べし。見合すべし。

執筆作法

一 執筆膝行して、両手元文台を少し前によせて持上、床の左右、座敷の程よき方へ、膝にて廻りて座す。但、前刻ひそかに文台直すべき所を宗匠にうかがひ知り置べし。これ執筆の心得なり。

一 宗匠座に着、次に連衆各座につく。其ほどよき頃を見合て、硯を両手にて文台の右におろす。文台より一寸か、一寸二三歩前へ硯の出めなるやうに是を置。ふたを明け、あをのけて硯の右に少し筋かわせおく。硯の内を見る。墨よくすりて有とも二すり、三すり墨すりべし。扱、筆を取墨に染、筆をもち添て両手にて懐紙を文台の其中へ直してひらき、一重の懐紙 初折二ノ折 を文台の先へひらきながら直し、残る一重の懐紙 ……三四ノ折…也 をもとの処でたゝみ、左の手を添て取揚げ、右の手にて硯の蓋の内に置。扱、はじめの一重の懐紙を文台のまゑの方へ両手にて

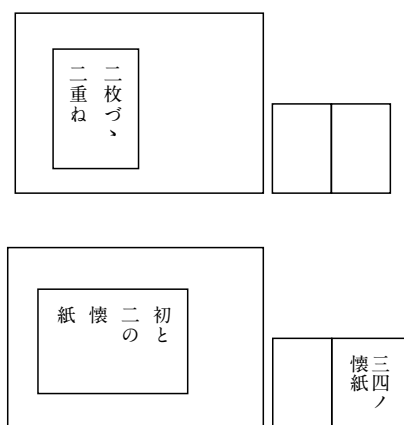
(二ウ)

引よせて発見を得、発句の作者より連衆へそと挨拶有て発句出る。

五文字出る。其まゝ吟ぜず、初の五文字より中音に吟じてまつ。扱、高声に吟じて、その時、宗匠、そのまゝ、とあるとき、懐紙を目八分にして端作りをなし、発句を書付、懐紙を文台へひらき、両手にて執り上又吟ずる。以上三遍吟ず。但し、初五文字とも三べん半と可心得。

(二ウ)

(二オ)



(二オ)

一 脇の句出んとする時、一座へ辞儀あり。其時発句吟ず。如此毎句吟ずるなり。脇句請取吟ず。されども、宗匠の方を少し目に掛けて差図を得て吟じて書付、また吟ず。毎句如斯一句を三べん宛吟ずると思ふべし。第三右に同じ。毎句同前。

(二三ウ)

一 筆を執りはじめてより始終筆を硯箱へ不入。もし、筆をはなす事あらば、文台の上、右の方、筆返しのすみに筆の先少し出て置いて、文台に墨のつかぬやうにすべし。

一 表は句出来、うらへうつる時、句書付、また、懐紙を表へかへし、書付たる面を上へ置べし。打越を見る為なり。裏二句出来のとき、懐紙の右の方を筆のじくにて押へ、重ねの紙を左の手にて六七分ぬき出し、右の手添て打返す。はつ折の懐紙を重ね置。以上少し口伝在。紙の端に(マ)少く二の字を書いて句をまつ。二の字紙の中程より下らぬやうにとなり。三の折同じく、名残の折、四の字不書。

【頭注】裏十四句出来の時、本文の通りにしてもよし。

二枚づゝ重ね有懐紙中、一枚ハ紫ヲ面ヘシテ重ね置べし。

左ナキ時ハ、上一枚スキタル時、紫ノ方、面ニナルユエ也。

一 初折出来、二の折の紙は、初折の紙に重ねて置。二の折出来の時、二枚ながら重ねて文台の先へ直して硯蓋の紙をとり、三の字書、文台にひらき、一折く文台のさきへなをすもあり。

【頭注】初折出来たらば、重ね有中の二の懐紙の右の方、少し出しかけて有を、筆の軸に

(四オ)

て押へ拔出し、初折を文台の方へ広げながら置可。指合見もよし。三四の懐紙も前同断。

一 指合、去り嫌ひを能く油断せず、こゝろにかけて探るべし。これ執筆の役なり。宗匠は句のよしあしを吟味するなり。執筆の心得ぬ事か、又は、連中よりそれはいかゞなど、有時、宗匠一座の凝を正すもの也。

一 表の十句目まで月なきときは、秋どころと云うべし。月秋とはいはず。花月の場を心にかけてことわるべし。挙句二度吟ず。懐紙を文台の上にて書べからず。手に取て目八分にして書べし。執筆の行跡也。

(五オ)

【頭注】季所と云もよし。

句ひの花二度吟じ、挙句一辺もよし。あとへ残す心もちなり。

一 威儀正しく、安座せず、座をたゞず、菓子など食せず、欠びせず、眠らず、咄しせず、文字を問はず。但、句によりてたまくと不解は問ふ事もあり。千句杯のときは、取分て知らぬ字は仮名にてすらくと早きが第一なり。三の折より吟声つよく、名残の折、猶高声に吟ずべし。座中の退座なきやうにとなり。

一 座のしめりぬるも執筆の難なるべし。付句間遠に付ざる時は、吟ずる事あり。然ども

(五ウ)

さいくせわしく吟ずれば、またやかましく聞へて句の出べき趣向の邪魔になる物也。

とかく興程く時の宜やうにこゝろへべし。

一 遅参の連衆有て、宗匠或は座上より、二三句誦わへとある時、軽う中音に誦べし。

但、前句計を高声に吟ずべし。打越の句いかゞと連衆より問はるゝ時もあり。右のごとし。但し、貴人、高位の会には遅参の人はなきものなり。

(六オ)

【頭注】前句二度吟ズベシ。

一 夜会は夜の更るに随ひて高声に吟ずべし。懐紙は秋の野のみだれたるやうに書べし。二行に書、初のかだりの末と名乗と並ぶほどに書べし。懐紙半分に六句ほど書て、奥半分に八句程と心得べきなり。すへほど文字小さく筋のとうらぬやうに書べきとぞ。また、碁石の乱れたるやうにも書なり。

一 連衆より用有て筆をからるゝ事あり。硯箱に残りたる今一本の筆を出す。貴人には、軸の末を持て出す。常の人には、中ほどをもち、その時は、我筆を左の手へ持替るなり。出す筆には、墨をたぶくと染て出すなり。

(六ウ)

一 一座満座せざるに、俄なる事出来ておのゝ

退出せねばならぬ時、宗匠心得あり。執筆同

口伝あり。曰、立せて宗匠へ句あり。古韻満座拳句吟じて

終りて、四折の紙ひとつに両手にて打かへ

し、懐紙の端に年号、月日をちいさく可

有。但、十支を不書。尤、とぢめにかゝらぬやうにすべし。

(七オ)

一 満座の上、吟じられよとある時、中音に吟て

其時、連衆も句引すると心得て、面くの

句数を算じてまつ。吟終りて発句の作者

より一巡の次第く懐紙の奥に句引

するなり。十人ならば、上に六人、下に四人とこゝろ

へて書べし。

【頭注】満吟の上、水引にて水結に開て、夫よりあげるよし。

一 懐紙閉よと水引出る時、三筋或は五筋

出るなり。三筋のときは、一筋をうゑ、二筋を

下にして閉べきなり。五筋の時は、二筋上る也。

(七ウ)

【頭注】水引は初より是非出る筈也。

三つに折たる懐紙の中へはさみて文台に饒て置べし。水引の端紙にて少し計ひねり可置。とぢる時通よき為也。但、目立ぬ様に仕て置べし。

一筋にても水結出来るなり。水結は手業なり。書取がたし。

一 懐紙とぢやうは、両手にてとり上、左の膝を

【頭注】銘に硯なき時の重硯は引べし。

立て、左の脇にて懐紙の末を押る。紙の
 乱れぬ為なり。硯箱の内に半さし、小刀、錐
 なども有べし。それにてとぢる。さもなければ、
 脇指の小刀、前かたにぬき置也。小刀共に文
 台の上には不置候。硯蓋の上に置てとぢる
 なり。草臥たる顔せず、静かに硯、懐紙し
 まいて、右の如くに文台にならべて、右床の前
 にも初にあつたる所に置之。本尊あ
 らば拝して退くべし。

(八才)

【頭注】小刀、錐初めより硯箱に入置べき筈なり。

右、水引の先き紙にてひねり置に不及、水引の先きをのりにてかため置もよし。

右天来宗匠口伝。

一 堅懐紙などは、即座の事なり。発句ゆ
 るやかに書下して、右に名乗をかき、発句の
 とまりに少しさがるほどに書べし。
 脇句その句の下に名乗をかき、末く如此
 発句の作者の並びにすゑくまで上り下り
 なきやうに並びよく書べし。雲紙、鳥の子
 などにて言はゞ下の明き五六歩明く様に
 名乗書べし。但、貴人あらば心得あり。
 一 懐紙端作の事
 筆取始て賦の一字を書、発句をまつ
 なり。連歌の常なり。
 貞徳流の俳諧には賦物とらず。

(八ウ)

是は貞徳翁

玄旨法印と御相談にて侍れば秘決也。
 然れども、懐紙をひらき其まゝ不書、宗匠
 のそのまゝと有時、俳諧の連歌と書べし。
 但、こと葉書などあれば、端作りの前に小く書也。

俳諧宴之連歌

俳諧夢之連歌

連歌上賦下賦常の事なり。追善会にても
 端作いづれも右のごとし。

一 惣じて前句吟ずるに心得あり。句切、清濁
 吟声こゝろに掛るべし。声訛りなど
 すれば、よき句もあしざまに聞へ侍る。句々
 毎に有べし。又、前にさし合ありと言

時、過たる懐紙を打かへしく見るべからず。
 さし合ありとも跡より思ひ出して言ひ
 出すべからず。とかく一座の首尾よきやう
 にとたしなむ事執筆の肝要也。

(九ウ)

右連歌執筆之作法者、宗匠被定
 置所也。是於紹巴法眼、先師長頭
 丸受之、吾先生芭蕉翁伝之、予復
 受繼之、且可為執筆之要事、俳諧
 之事問。又承口説条々、今所々雅
 丈異依懇望而、書写許之伝之口
 決等可被秘之者也。

享保三年初冬十三日 其角

淡々丈

(一〇才)

にて菓子を引べし。炙たるあられ、黒豆、外に積合テ、菓子は亭主の心持次第なり。

扱、重硯併半紙にても小短冊を引べし。

一 連衆付句は、小たんざくに認め、文台の向ふに

手を突、御前句と断、小短冊を出す。執筆

前句を軽く吟じ、句をうけ取、去嫌ひを

とくと吟味して宗匠へ伺ふ。よしあしは

宗匠極む。去ぎらひを見るは、執筆の役也。

宗匠よしとあらば、句を書べし。書終らば

句者辞儀して、元の座につくべし。

一 句ひの花前は、我句に手柄せず。花の付

よき様にやすらかに句作るべし。それも月

次会などには、わざと花に功者をさせんとて、

恋、或は、むつかしき古事などもする事

もある也。本式には決して花へ会釈す

べし。

一 うら一順と執筆断る時、亭主罷出、文台

脇の宗匠或は、貴人、功者の老人へ花を

望べし。互ひに会釈有ての後定む。さて、

花前と断時、勝手より亭主香炉を持出

作者の前へ出す。作者立て、これを備へ、座に

つき、花の句を執筆へわたす。

但、香炉を亭主直に備るもある也。併、宗匠へ挨拶有ての事也。

裏へかゝると、勝手に香の用意、手はづやうすべし。

一 満吟の上、連衆ひとりく、宗匠、次に執筆へも

挨拶に出べし。

一 懐紙文台の上にて書べからず、左りの膝を

(一二ウ)

立、手に持、目八分にして書べし。

一 初折 一順認め有 よみ仕廻ける時、重ねて有

二の折の懐紙、右の方かねて少し出し掛

あるを筆の軸にて押へ、左りの手にて上ヲ抜

出し、初折の懐紙は文台の向ふの方へ

広げ置く。扱、二の折にも一順書てあらば、つゞ

いてよむ。一順の終り二へんよむで句を

待つ。扱、二の折書終らば、向ふにある初

の懐紙の上へ重ね置き、扱、硯蓋にある

三四の懐紙取て右ノ端の真中の程に小さく

三の字書置く。三の表うら書終らば、初

通り筆の軸にて押へ拔出し、向ふの

懐紙の上へ重ね置くなり。尚、所々本文と

可見合。

先に本文をくわしく見て、後に此書を見るべし。本文に

あづけ略したる所ある故なり。

所作等は書取がたし。勤めて知るべし。

右は二柳宗匠口伝及び、別伝の正しき

より抜萃して聊愚意を加へず。

幸ひに余紙あるにまかせ、つる雄

みづから誌置もの也。

寛政四壬子年卯月十五日

天保十五辰年四月写之

不角

桂高

(二三ウ)

(二四オ)

(二四ウ)

右ハ此度相伝之上、致了解ニ付、各能心底ニ保チ、猥ニ他言致間敷事。

不二庵不角 不二庵

(一五才)

蒼映

(一五ウ)

(一六才・裏表紙見返し)

(一六ウ・裏表紙)

付属文書(一枚紙)

起請文之事

我等俳道執心に付、此度

俳諧文台執筆之法

御口伝之上、伝書為御写

被下難有忘却不仕相写

猥ニ他言致間敷候。依而

如件。

明治十九年十月 高砂蒼映

不二庵不角殿

二 翻刻 『俳諧会式』

近江

古巢園去何翁著

俳諧会式 第五輯

朝日のや 印

(表紙)
(表紙見返し)

俳諧会式

古巢園去何著

旭山校

執筆意得 下^タ懷紙を懷中して罷出

一札して文台にかゝり、右の膝を立、かの下懷

紙の一順を懷中 より取出し、さらくと

書之。懷紙、百韻ならば四枚、歌仙ならば二枚

重ねながら、三つに折之。下懷紙は豎懷紙也。

キリくと巻て少し出しかけ、懷中する也。

それより付句出候はゞ、宗匠の氣を見て懷

紙にのせ候也。月秋、花の打越、花前、

月、花、などことはるべし。裏一順こと

はるべし。

吟ずるに及ても、筆をはなたず一札して、

筆持ながら懷紙一枚とりて吟じて 但一順名

を挙る。再順名を挙ず。 文台の向ふ方へうつぶけに置。

又、一枚とりて其通りにし、次第終りて

取直し、水引にて手ばやく閉て、三つに折り

文台のまん中に置。扱、両手にて文台を

(二才)

(二ウ)

(二才)

捧立て正面へ直し、一礼して退くべし。
御執筆御苦勞と一座の中より挨拶有て
くつろぐべし。

一 短冊吟じやう 短冊を不残重ねて

左の手にうけ、右の手をそへ、吟じては一枚づ、

左の無名指の股にうつぶけにはさむ也。次第

乱さず吟じ終りて、もとの如く懐紙箱の

蓋に置也。文台に懐紙の左にのせて猶

よし。懐中箱に置ては短冊のこりて不

拍子なり。

一 名残の花より挙句へ続けて二返吟じ

たる人あり。老師に尋しに、やはり名残

の花二へん吟じて挙句吟ずべし。

一 名残の花の事 法楽又は、追善など名ある

会の時、裏一順に移ると、宗匠より古老へ相談

して、花はどなた可然哉といふ。宗匠はさし図

被成候処にと挨拶有て、然らばどなたへ御頼可申と

さし図の時、無調法もの、段一、辞等有て、是

非共と有し時、然らばと領掌申す事也。さて、

花前とこととはると、頓て亭主方より立て、香盆

を花ぬしの前に膝だけほど向ふへ逢する也。

僭に御香の用意可仕哉と尋ぬ。花主麁香

ながらと申也。もし、貯無之候はゞ、然らばと申也。

扱、執筆、花とこととはる也。謹む体にて句を案ず

べし。句出来て宗匠領掌の時、執筆吟じ

て書之。花主焼香し、一礼有て、香盆

(三ウ)

(四オ)

(四ウ)

(五オ)

を両手にさゝげ立て神前へ備へ、一礼して
もとの座に付て、宗匠へ一礼し、且一座へ
礼する也。

一 一順の意得は、長句を上達へ譲るやうにする

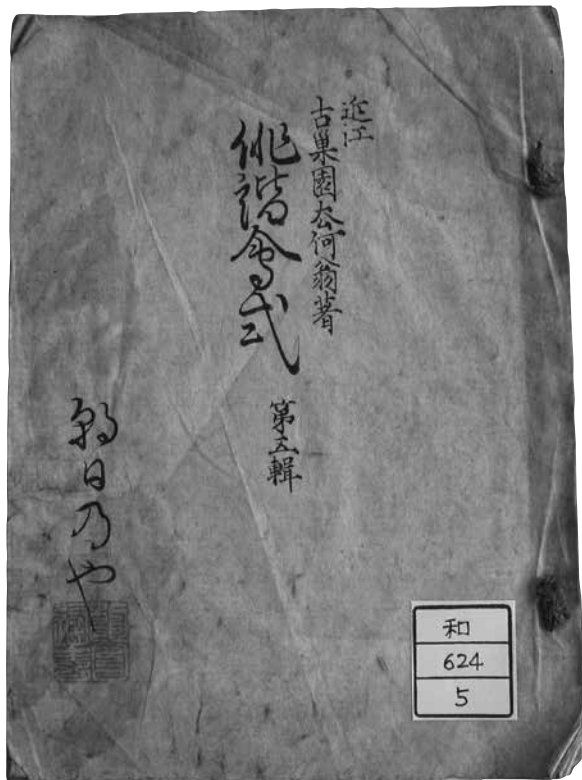
心得なるべし。

(五ウ)

(六オ・裏表紙見返し)

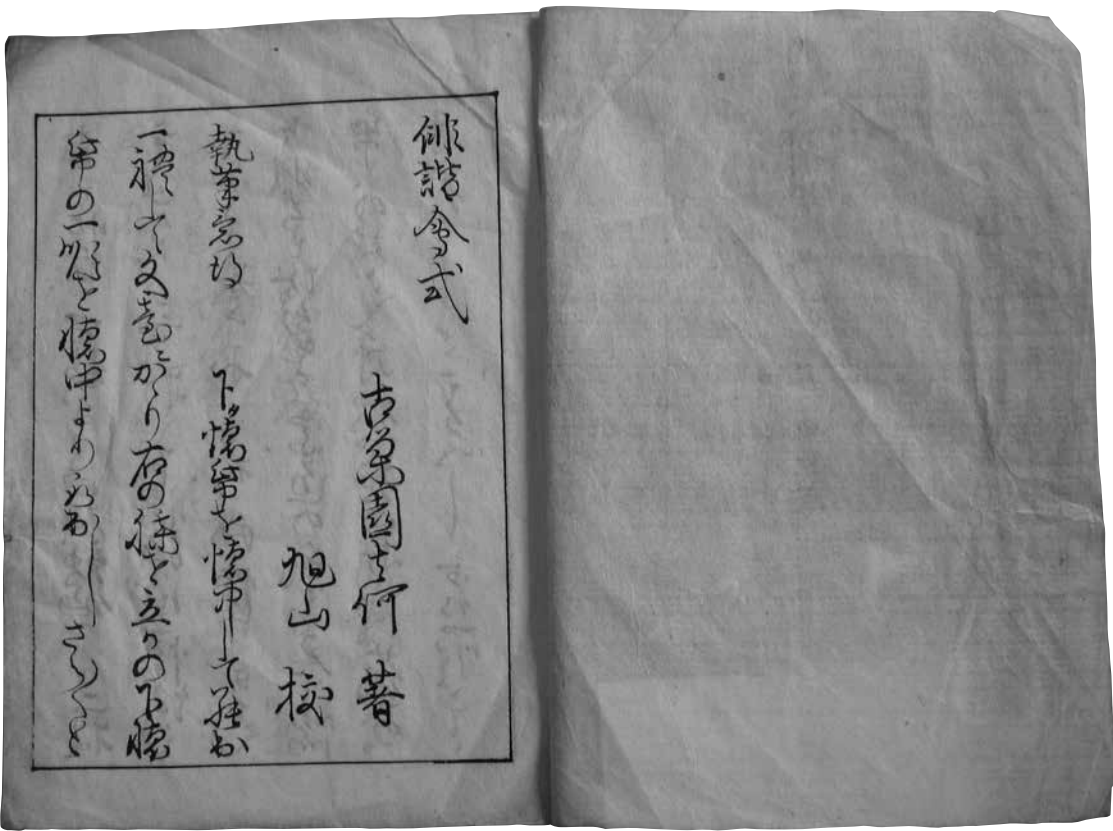
(六ウ・裏表紙)

【表紙・一表】

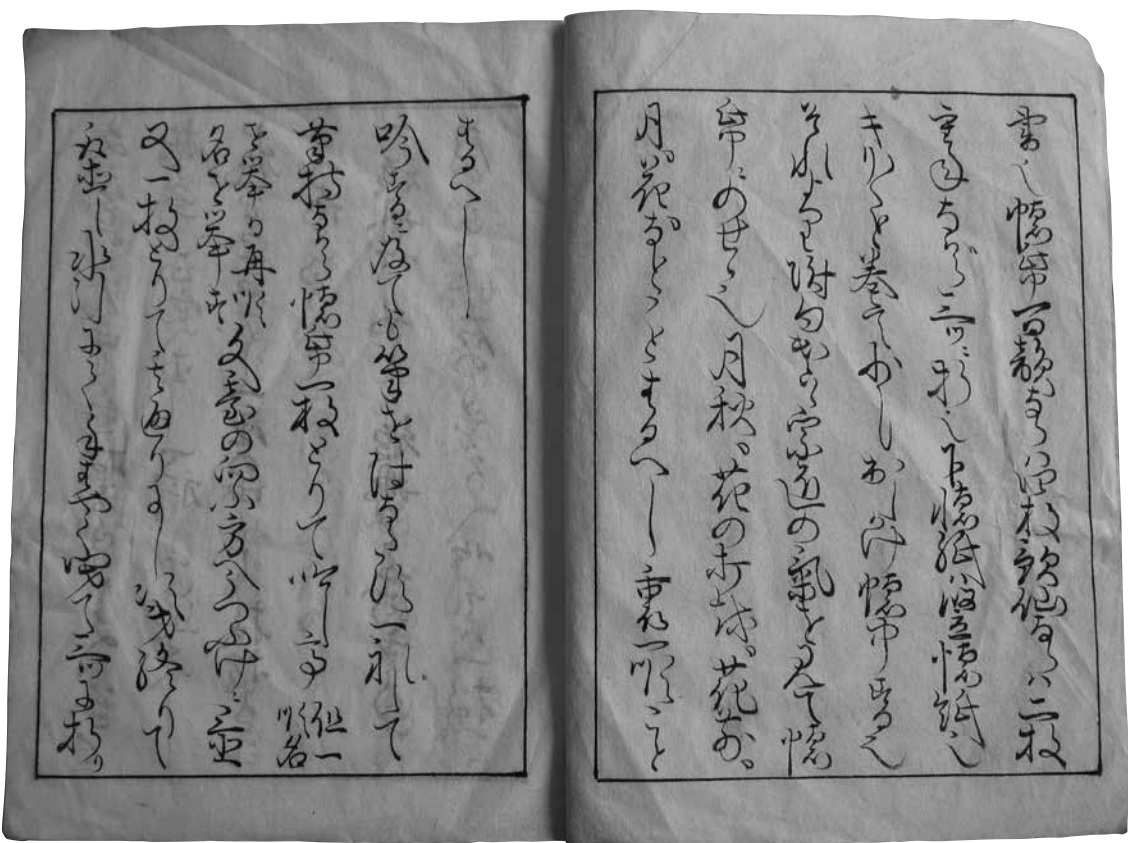


和 624 俳諧會式 第五輯

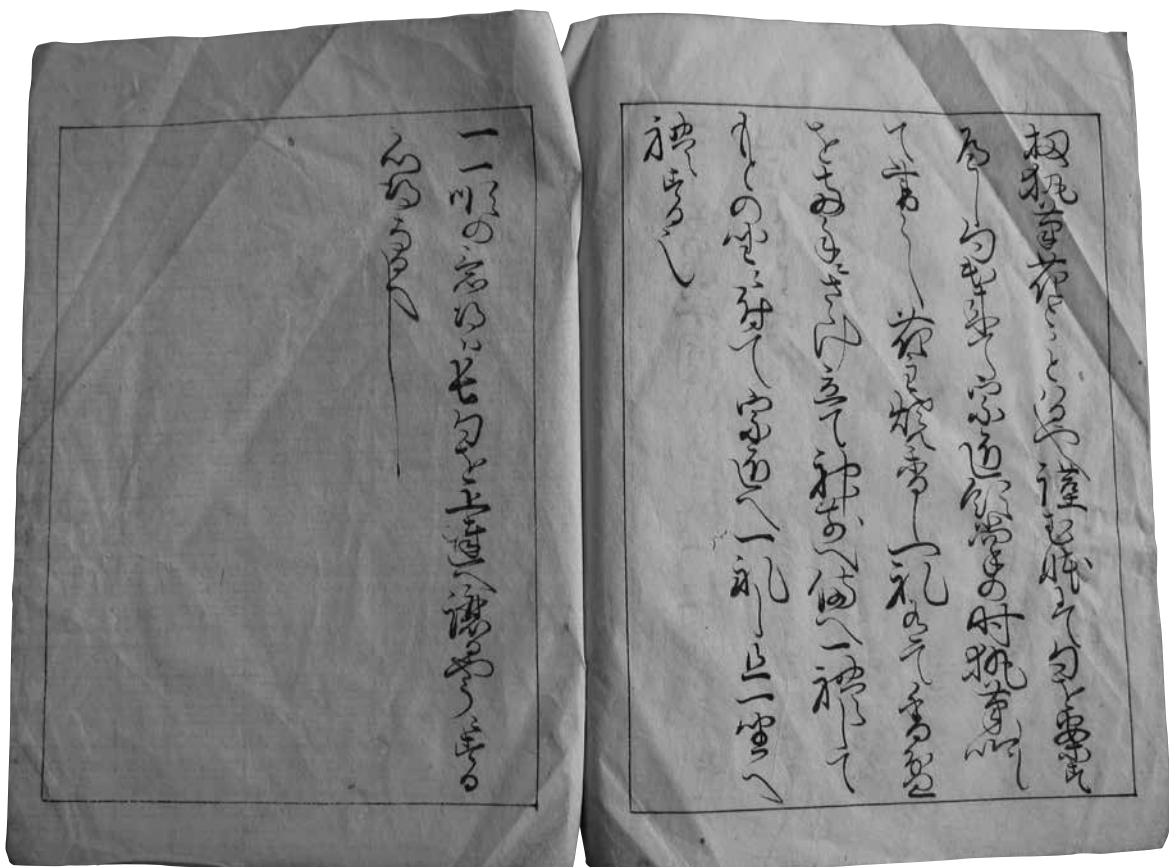
【一裏、二表】



【二裏、三表】



【五裏・六表】



【六裏・裏表紙】



【付記】

野風呂記念館蔵『俳諧会式』の翻刻にあたり、当該館の学恩を得ました。記して感謝申し上げます。

【注釈】

- (1) 伊藤善隆「翻刻『執筆卷』」(国文学研究資料館・調査研究報告第三五号、二〇一五年三月発行)
- (2) 鈴鹿登氏、俳号野風呂旧蔵。京都市左京区吉田中大路町。「京鹿子社所蔵和古書目録(稿)」がある。

